

厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策政策研究事業)  
地域におけるMSMのHIV感染・薬物使用予防策と支援策の研究  
(21HB1004)

## 令和3年度 総括研究報告書

研究代表者：樽井 正義 (特定非営利活動法人ふれいす東京 理事)  
令和4(2022)年3月31日

■ 研究代表者：樽井 正義(特定非営利活動法人ふれいす東京 理事)

■ 研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ふれいす東京 代表)

大木 幸子(杏林大学保健学部 教授)

塩野 徳史(大阪青山大学健康科学部看護学科 准教授)

野坂 祐子(大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)

### 研究要旨

「MSMを対象としたメンタルヘルスと性行動に関するweb調査」では、その準備のために対象者へのフォーカス・グループ・インタビューを行い、調査参加者への案内を出会い系サイトからSNS、掲示板に拡げること、調査項目の薬物使用にアルコール、市販薬を加えること、相談利用を促す方法を探ることなど、前回は継承するとともに状況の変化に対応する調査の企画で留意すべきことを確認した。

「ゲイコミュニティにおける性行動および予防啓発に関する動向の把握と効果評価」では、3年連続調査の1年目を行い、先行調査に比してコミュニティセンターによる啓発活動の認知度は上がっていること、MSMのコンドームの常用率は20%台に下がっていること、また新型コロナ感染症の影響でHIV抗体検査受検を控えた人が4分の1、性行動を抑えた人が半数ほどいることが示された。

「MSMを対象とした健康のためのコミュニケーション支援ツールの開発と評価」では、トラウマと逆境体験が現在の行動、認知・感情、対人関係に及ぼす影響を考慮した支援(Trauma Informed Care : TIC)をふまえて、MSMを対象にオンラインプログラム「アサーション・トレーニング」と「ストレスマネジメント講座」を実施し、オンラインで自習できるコミュニケーション支援ツールを開発した。

「薬物使用の問題を抱えるHIV陽性者への支援のための精神保健福祉センターとのネットワークモデルの検討」では、MSMあるいはHIV陽性者からの薬物相談を受けた経験のあるセンターの担当者への面接調査により、相談者との継続的な支援関係を築くための方法と、他の支援機関との連携の方策とを整理し、相談継続のために担当者への支援体制が求められることを指摘した。

「HIV陽性者と薬物使用者への支援策と感染・薬物使用予防策の検討」では、文献調査から、薬物使用者は使い続けたい人、減らしたい人、止めたい人にほぼ三分されること、使用者には感染症のリスクが高いことが示された。HIVと薬物使用に関わる支援者への面接調査からは、薬物使用に付随する感染症と感染予防の情報、相談窓口の情報の提供が求められることが確認され、提供する方策が提案された。

## A 研究目的

MSM の HIV 感染・薬物使用の予防と支援を目的に5つの研究を行う。

### (1) MSM を対象としたメンタルヘルスと性行動に関する web 調査(生島嗣)

2016年実施の LASH 調査を拡充してウェブによる質問紙調査を行い、メンタルヘルス、薬物使用、性行動等、各地域の現状を把握する基礎データを得る。10-20代の出会い手段利用の現状を把握し、有効な情報発信のあり方を探る。また、薬物使用、 Condom 不利用の背景にある、他者依存のコミュニケーション、逆境経験等を把握する。

### (2) ゲイコミュニティにおける性行動および予防啓発に関する動向の把握と効果評価(塩野徳史)

全国6カ所のコミュニティセンターにおける HIV 感染予防啓発活動(対面、印刷物、web等)利用者の予防意識・行動について質問紙調査を行い、その活動の効果、センターのない地域と比較して評価する。都市部のセンターで若年層と薬物使用者に対面による感染・薬物使用予防介入を行い、効果を評価する。

### (3) MSM を対象とした健康のためのコミュニケーション支援ツールの開発と評価(野坂祐子)

MSM の HIV 感染と薬物使用を予防する上で、リスク行動を避け健康に生活するコミュニケーションスキルの向上が求められるが、とくに逆境経験により感情表出や調整、安定した対人関係構築が苦手な傾向をもつ若年 MSM に考慮し、オンラインでセルフスタディが可能な支援ツールを開発し、その評価を行う。

### (4) 薬物使用の問題を抱える HIV 陽性者への支援のための精神保健福祉センターとのネットワークモデルの検討(大木幸子)

全国の精神保健福祉センター職員調査では、陽性者からの相談経験は少なく、陽性者、性的少数者への対応への抵抗感も見られたが、経験のある担当者には、異性愛者の薬物相談との共通点多いとの見方が認められた。そこで、共通点と相違点を明らかにし、薬物使用の問題を抱える HIV 陽性者への支援にあたって、

HIV 診療機関や陽性者支援組織と精神保健福祉センターとの連携モデルを検討する。

### (5) HIV 陽性者と薬物使用者への支援策と感染・薬物使用予防策の検討(樽井正義)

HIV 陽性者と薬物使用者の概数と所在を文献調査により推定し、生活上医療上の課題、薬物使用と感染(HIV、HCV)予防に必要な情報を、当事者と支援者(拠点病院医療者、陽性者支援と依存回復支援の施設職員)への面接調査により明らかにする。支援者の協力を得て、情報を整理した資料を作成し、その提供方法を検討し実施する。

## B 研究方法

(1) 3年計画の1年目(本年度)に、MSM の当事者を対象としたフォーカス・グループ・インタビューを行った(5回、各回3人計15人)。インタビューは半構造化形式を採用し、内容は、①最近の MSM コミュニティにおける出会いの手段の変化について、②セックス時に使う併用品について、③性の健康とメンタルヘルスについて、の3点を軸とした。また、依存症を含めたメンタルヘルスや HIV についての啓発プラットフォーム「Stay Healthy and be HAPPY!」に MSM 向けの新たなコンテンツを追加し、さらにクラブイベントで当プラットフォームを周知するキャンペーンを行った。次年度はインタビューをふまえて、MSM のメンタルヘルスと性行動に関するオンラインアンケート調査を実施する。

(2) 本年度は、コミュニティセンターにおける HIV 感染予防啓発活動の効果測定の指標として、利用者としていない MSM の予防意識・行動を調査する質問紙を作成し、全国の6センター、センターのない3地域の NPO 及び SNS で調査を実施し分析した。質問項目は HIV や性感染症に関する知識と意識、過去6ヶ月間の HIV やエイズに関する対話経験、検査行動、性感染症既往歴、性行動等とした。調査期間は2021年9月-10月の1ヵ月間、回収された4,171件から重複回答と海外居住18件を除き、3,969人のデータを分析した。統計的有意差にはカイ2乗検定を用い、有意水準を5%未満とした。データの集計および統計

処理には IBM SPSS Statistics 23 (Windows) を用いた。

(3) 本年度は、文献により MSM の HIV 感染と薬物使用の関連性や行動傾向を調査し、コミュニケーションスキルをテーマとしたセルフスタディツールの構成要素を検討した。また、支援ツールの開発に向けて、HIV 陽性である MSM の支援を行う NPO 団体の協力を得て、同対象への「アサーション・トレーニング」と「ストレスマネジメント講座」をオンラインで開催し、コミュニケーションにまつわる課題への反応等を把握するとともに、web アンケート調査を行い、対象者のニーズと学習内容への評価を得た。それらの結果をふまえて、若年 MSM を主な対象とする動画教材と解説教材を作成して公開した。次年度に教材の評価を行う。

(4) 精神保健福祉センターで MSM あるいは HIV 陽性者からの薬物相談の経験のある担当者に面接調査を、2 名はグループで、3 名は個別に行い、逐語録を作成して質的に分析した。異性愛者の薬物相談と比較して共通している支援内容及び特徴的な支援内容を明らかにするために、次の質問をした。①相談に対する支援の展開、②精神保健福祉センターが担った役割、③連携した機関、④他の支援機関が担った役割、⑤他の機関との連携のポイント、⑥支援の中で大切にしたこと、⑦セクシュアリティや HIV 陽性であることの支援過程(相談過程)への影響、⑧セックスドラッグの使用の相談過程での具体的扱い。

(5) 本年度は、先行研究を調査し、薬物使用者と HIV 陽性者の現状(対象人数、所在、状況等)を把握した。また薬物使用者と HIV 陽性者への支援提供者(エイズ治療拠点病院医療者、HIV 陽性者支援組織職員、薬物依存回復施設職員 各 2 名、薬物依存研究者 1 名)に面接調査を行い、薬物使用者と HIV 陽性者が直面している生活上、医療上の問題、感染と薬物使用の予防と支援の現状について情報を収集し、感染と使用の予防と支援に求められる情報とその提供可能性を検討した。これをふまえて次年度に、使用者と陽性者の生活上、医療上の問題に対処し感染と薬物使用の予防に資する情報を整理し、情報を必要とする対象集団を特定

し、情報提供の方法を策定して実施を試みる。

(倫理面への配慮)

各研究分担者の所属機関の IRB に研究計画の審査を申請した。質問紙調査は無記名であり、回答をもって参加への同意とみなした。面接調査に際しては、説明の上同意を取得した。

## C 研究結果

(1) MSM へのインタビューから、出会いの手段は多様化しており、出会い系アプリよりも SNS が使われる傾向にあること、セックスドラッグとして認知度が高いのはラッシュだが、禁止されて覚せい剤に移った人もいること、初めての使用には相手への好意や集団圧力が影響していること、コミュニティとの交流が盛んな人ほど使用する可能性が高いが、依存まで進行するのは人との繋がりが薄い人である可能性が大きいこと、依存の対象がアルコールや市販薬という人もいる可能性があること、PrEP については、認知度は上がっているが、コンドームなしのセックスが出来ると思う傾向が見られること、自身の性の健康やメンタルヘルスについて、家族や友人には相談できず、公的な相談窓口は敷居が高いこと等の意見が聞かれた。これらを質問紙調査の資料とするとともに、分担研究(3)と共有してコミュニケーション支援ツールを作成し、ウェブサイトに掲載した。

(2) 全国 6 カ所のコミュニティセンターの認知率は全体では 45.4%、過去 6 ヶ月間に利用した人は 8.7% だった。HIV 抗体検査の受検経験がある人は 68.7%、過去 1 年間では 28.9%、受検場所は病院・クリニックが 11.9%、保健所 10.6%、郵送検査 6.9% だった。過去 6 ヶ月間に男性とセックスした人の割合は 74.7%、コンドームをつけずにセックスしたことがある人は、被挿入側では 42.8%、挿入側では 45.4% だった。コンドームをつけない理由は、つけない方が気持ちよい(48.8%)、つけない方が一体感がある(31.5%) が多く、PrEP を服用しているからは 10.3% だった。PrEP については、その情報を知っている人は 25.9%、過去 6 ヶ月間に服薬経験がある人は 6.7%



だった。過去1年間のHIV検査受検経験は、服薬経験がある人では76.8%、ない人では25.3%であり、有意差がみられた( $p < 0.01$ )。

(3) 文献調査から、HIVリスク行動と薬物使用における最強の因子は成人期の危機と18歳未満での成人からの暴力であり、MSMに対しては、トラウマと逆境体験が現在の行動、認知・感情、対人関係に及ぼす影響を考慮した支援(Trauma Informed Care : TIC)の必要性が指摘された。これに配慮して、コミュニケーションスキルの向上をはかる2つのオンラインプログラム、「アサーション・トレーニング」(参加者8名)と「ストレスマネジメント講座」(3回連続、各回7名)では、自分の感情の理解と調整に重点を置いて、企画し実施した。これらをふまえて、コミュニケーション支援ツールとして、自分のコミュニケーションの仕方が①ダメ出し・攻撃タイプ ②言いなり・がまんタイプ ③爽やかアサーションタイプ ④隠れ攻撃タイプ、どのような傾向があるのかに気づかせる自己学習用ワークシートと動画を、分担研究(1)の協力を得て作成した。

(4) 精神保健福祉センターの相談担当者への面接調査から、(1)相談者との継続的な支援関係を築くための方法として、①通報しない立場を初めに明示、②中立の立場を維持、③性行動や性行為に関連する話題のそのままの受け止め、④セクシュアリティに関する情報は相談者を理解する重要な情報、⑤性行動や性行為に関連する話題を踏み込んで扱える場の考慮、⑥リスク行為や使用行動の話題への非審判的態度、⑦常に待っていることの強調、が示された。(2)他の支援機関との連携の方策としては、①治療や回復支援の導入機関としてのセンターの役割の自覚、②生活支援のための地域他機関との連携、③セクシュアリティは薬物使用に影響する重要な情報として連携機関に伝えるよう相談者との話し合い、が挙げられた。また、(3)相談継続のための担当者への支援体制として、再使用が繰り返されることによる担当者の葛藤に対して、スーパーバイズ体制が求められた。

(5) 薬物使用に関する先行研究の調査から、私たちの社会には生涯使用経験者が2.5% (200万人強)いる

が、その90%は使用を止めており、過去1年使用経験者は0.24%(およそ20万人)おり、使い続けたい人、減らしたい人、止めたい人にほぼ三分されること、覚せい剤使用経験者には注射器の使用、セックスの時の使用の経験率が高く、HIV陽性は少ないがHCV感染既往が半数近くいることから、健康危害である感染を予防する情報がハームリダクションとして必要なことが示唆された。陽性者と薬物使用者への支援者に対する面接調査からは、新しいHIVの情報と感染予防情報が不足しており、安心して相談し支援が受けられる窓口の情報が求められること、使用者と陽性者への情報提供の方途としては、刑務所や保護観察所と協力関係にあるダルク職員、薬物使用を健康問題ととらえている拠点病院医療者と連携して行う必要があることが示された。

## D 考察

(1) MSMのインターネット調査で考慮すべきことが、フォーカス・グループ・インタビューから得られた。調査参加の呼びかけは、出会いの場の多様化に配慮し、出会い系アプリだけでなくSNSや掲示板でも行うこと、調査項目の依存については、アルコールや市販薬も視野に入れること、どのような窓口であれば性の健康やメンタルヘルスを相談しやすいのかを訊ねることなどである。またコンドーム使用、HIV検査行動、薬物使用、周囲への相談といった行動の背景には、対人コミュニケーションのあり方、幼少期の逆境体験、ソーシャルサポート環境などの要因が関連していることが示唆された。誰かに相談という行動について言えば、慢性化している孤立感や疎外感により、相談自体が選択肢として思い浮かばないように思われる。調査への参加が自分の行動に気づき、変容につながるきっかけとなるように、調査項目を検討することが求められる。

(2) コミュニティセンターとMSMに関する同様の調査が東京では2013年に、他地域では2017年-2019年に実施されたが、本調査にはそれらと比較できる項目を加えた。コミュニティセンターの認知率は、啓発対象となっている地域では上昇が見られた。HIV抗体検査の受検行動は前回から横這いだった。コンドームの常用使用は2010年以降低下傾向にあり、50-

60% 台であったのが、本年度の調査ではどの地域でも 20% 台であり、また相手が彼氏や恋人、友達やセクフレ、その場限りでも同様であることから、全体的にコンドームの使用行動の低下が見られ、HIV と他の性感染症の拡大が懸念される。また、新型コロナウイルス感染症の影響を受けている時期に焦点をあて、過去 6 ヶ月間あるいは 1 年間の状況を尋ねると、その影響で検査の利用を控えた人は 26.5% だったが、感染拡大前と比べて、セックスする頻度が減った人は 51.5%、人数が減った人は 48.8% だった。

(3) オンラインプログラムの実施を通じて、参加者が自分の感情を理解し考えを自覚することが困難であること、自己の認知と自他の境界線の同定は、個人の育ちや経験と深く関連し、コミュニケーションの重要な要素となることが改めて確認された。このことから、トラウマ・インフォームド・ケアの観点をふまえて、学習の内容と方法を工夫する必要が示された。プログラムは講師からの一方向ではなく、参加者との対話形式も取り入れたが、他の参加者の意見も聞けることに対して高い評価が得られた。対話へのニーズは高く、プログラム自体がコミュニケーションを実践し反省する場となったことが、好評の理由と思われる

(4) 精神保健福祉センターが薬物相談においてはたしている機能は、①相談者の回復支援の入り口、②安心して相談できる場、③いつでも戻ってくるのでできる場、④生活支援につなげる役割、と見ることができる。MSM および HIV 陽性者からの薬物相談において、相談担当者は他の相談者と同様に生活支援を提供するが、相談者を理解する上で、セクシュアリティは重要な要素であると考えられる。薬物使用の背景に性行動や性行為があるので、これらを話題としなくてはならないが、そのときに具体的な行為を語りやすくするには、相談者のセクシュアリティが否定されることがないという安心感をもたれることが、なにより重要になると思われる。

(5) 薬物使用に関する情報提供は、住民一般に向けた乱用防止キャンペーンとして行われているが、薬物使用者には有効ではない。使用がもたら犯罪と見なされる社会では使用者はそれを隠すゆえに、薬物使用者

に対して有用な情報を届けることは、極めて困難である。刑務所にいる、あるいは保護観察所に通う使用者に、そして使用者が含まれると想定される陽性者に、支援しているダルクの職員やエイズ診療機関の医療者の協力を得て、健康問題としての薬物使用に関わる情報を提供する試みは、対象人口 20 万人のごく一部に届けることにしかならないが、具体的で可能な方策の一つと考えられる。

## E 結論

MSM、HIV 陽性者、薬物使用者を対象に、HIV 感染と薬物使用の予防策と支援策を策定し実施することを目的とする本研究は、対象者の現状を把握する 2 つの分担研究と支援策を検討する 3 つの分担研究から構成される。

3 年計画の初年度において、MSM を対象とする数千規模の調査では、その準備として対象者のフォーカス・グループ・インタビューにより、MSM の現在の行動に即した調査参加者募集の方法と新たに必要とされる質問項目などを明らかにした。

全国 6 力所のコミュニティセンターを中心とした 3 年連続の調査の 1 回目を実施し、MSM のコンドームの常用率が 20% 台に低下したこと、新型コロナウイルス感染症の影響で HIV 検査受検を控えた人が 4 分の 1 いることなどが示された。

MSM のコミュニケーションスキルへの支援策として、トラウマと逆境体験が現在の行動、認知・感情、対人関係に及ぼす影響を考慮したオンラインプログラム「アサーション・トレーニング」と「ストレスマネジメント講座」を実施し、オンラインで自習できるコミュニケーション支援ツールを開発した。

精神保健福祉センターと他組織のネットワークによる MSM と陽性者への支援策を検討するために、センターの相談担当者に面接調査を行い、相談者との継続的な支援関係を築くための方法と、他の支援機関との連携の方策とを整理し、相談継続のために担当者への支援体制が求められることを指摘した。

薬物使用者と陽性者への支援策を検討するために、文献調査と両者の支援者への面接調査を行い、薬物使用に付随する感染症と感染予防の情報、相談窓口の情報の提供が求められることが確認され、提供する方策

が提案された。

## F 健康危険情報

なし

## G 研究発表

### 研究代表者

#### 樽井正義

##### 1. 論文・著書

樽井正義. HIV/AIDS から COVID-19 へ — パンデミックと生命倫理. 生命倫理. 31-1:3, 2021.

○ Koto, G., Tarui, M., Kamioka, H., Hayashi, K.: Drug use, regulations and policy in Japan. Japan Advocacy Network for Drug Policy. April 2020. [http://fileserv.idpc.net/library/Drug\\_use\\_regulations\\_policy\\_Japan.pdf](http://fileserv.idpc.net/library/Drug_use_regulations_policy_Japan.pdf)

##### 2. 学会発表

○ Hayashi, K., Wakabayashi, C., Ikushima, Y., Tarui, M.: Characterizing changes in drug use behaviour following bans of 5-MeO-DIPT, anil nitrite and new psychoactive substances among men living with HIV in Japan, 日本エイズ学会、2021 年.

○ 樽井正義、生島嗣、徐淑子、山本大. ダルクにおける性的少数者および HIV 陽性者への薬物依存回復支援の現状. 日本エイズ学会、2020 年.

### 研究分担者

#### 生島嗣

##### 1. 論文・著書

○ 生島嗣. ゲイ・バイセクシュアル男性のネットワークと相談行動— HIV・薬物使用との関連を中心に. 松本俊彦編, 「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか. 日本評論社. 218-230, 2019.

##### 2. 学会発表

生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、若林チヒロ、樽井正義. HIV 検査と告知時期に関する考察—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から—. 日本エイズ学会、2020 年.

生島嗣、三輪岳史、大槻知子、山口正純、大木幸子、

若林チヒロ、樽井正義. HIV 陽性と就労に関する考察—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から—. 日本エイズ学会、2020 年.

生島嗣. 地域における HIV 検査—「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から. 日本公衆衛生学会総会、2020 年.

Ikushima, Y. Patterns of PrEP use among men who have sex with men in Japan. Asia Pacific AIDS & Co-infections Conference (APACC) 2020, October 15-17, 2020.

生島嗣、三輪岳史、山口正純、大槻知子、水島大輔、岡慎一. GPS 機能付きアプリケーションを利用する MSM における PrEP の利用経験とその実態 (1). 日本エイズ学会、2019 年、熊本.

山口正純、三輪岳史、大槻知子、生島嗣、水島大輔、岡慎一. GPS 機能付きアプリケーションを利用する MSM における PrEP の利用経験と実施実態 (2). 日本エイズ学会、2019 年、熊本.

横幕能行、高橋秀人、生島嗣、伊藤公人、今橋真弓、渡邊真理子. 職場における HIV 感染症 / AIDS の検査機会提供の有用性と課題. 日本エイズ学会、2019 年、熊本.

Yamaguchi, M., Miwa, T., Ohtsuki, T., Ikushima, Y., Mizushima, D., and Oka, S. Change in awareness of, willingness to and utilization of PrEP over the past two years in Japan. The 10th IAS Conference on HIV Science, July 21-24, 2019, Mexico City, Mexico.

Ikushima, Y. Experiences of PLACE TOKYO: Challenges of Japan and Asia. The 5th AIDS Forum of Beijing, Hong Kong, Macau, and Taiwan, April 12-13, 2019, Taipei, Taiwan.

#### 塩野徳史

##### 1. 論文発表

1) 宮田りりい, ○塩野徳史, 金子代. MSM (Men who have sex with men) に割り当てられるトランスジェンダーを対象とする HIV/AIDS 予防啓発に向けた一考察 - ハッテン場利用経験のある女装者 2 名の事例から. 日本エイズ学会誌. 23(1): 18-25, 2021

2) 金子典代, ○塩野徳史: コミュニティセンターに來場するゲイ・バイセクシュアル男性の HIV・エイズ

の最新情報の認知度と HIV 検査経験, コンドーム使用との関連. 日本エイズ学会誌, 23(2), 78-86, 2021

3) 金子典代, ○塩野徳史. MSM を対象にした当事者主体の HIV 検査の取り組みと意義. 日本エイズ学会誌, 22(3): 136-146, 2021.

## 2. 学会発表

- 1) ○塩野徳史. コミュニティと予防介入の新たな戦略. 日本エイズ学会 2021 年 東京
- 2) ○塩野徳史. HIV 予防とヘルスリテラシー. 日本エイズ学会 2020 年 千葉

## 野坂祐子

### 1. 論文発表

- 1) 野坂祐子. 司法矯正領域におけるトラウマインフォームドケア: 対象者・支援者・組織の再トラウマを防ぐアプローチ, 刑政, Vo.132, No.11, pp.12-25. 2021 年
- 2) 野坂祐子. デート DV とは何か: 被害者・加害者への介入, 保健の科学, Vol.64, 90-94. 杏林書院. 2022 年
- 3) 野坂祐子. トラウマインフォームドケア ~当事者と支援者の安全を高めるアプローチ~, 心と社会, Vol.53, No.1, 40-45. 日本精神衛生会. 2022 年

## H 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし